

望江楼公園を後にして、昼食をとりひとまずホテルに戻った。午後1時になったので、ロビーから外を見ると車が1台停まっている。箱根日帰り観光をご一緒した王玲さんが見えたのだ。すぐに駆け寄って再会を喜び合った。

運転席には男の人がいて、ご主人ということが分かった。やさしそうなご主人と握手を交わし車に乗り込んだ。私の中国語会話の能力では十分な意思疎通が図れないと思って、日本語のできる友人に来てもらったので4人でホテルを出発した。

どこに向かっているのか聞いてもらうと、道教の聖地である青城山だという。途中2008年5月に発生した四川大地震の傷跡があるだろうかと車窓から見たが、そのような形跡は全く見られなかった。もっとも3年8か月余り経過しているので復旧したのであろうと思い、友達に聞いてもらうと成都市内は殆ど被害がなかったそうで、そのあと行く都江堰(成都市内から約70km)周辺は、かなり被害が甚大だったと言われた。

市内から北西に伸びている自動車専用道路を40分くらい走っていくと、青城山と書かれた三角形をした大きなモニュメントが見えてきた。そこで車を止めてもらい、ご夫婦と一緒に記念写真を撮った。また車を走らせ、蛇行する坂道を登り切ったところ

の駐車場で止まった。そこには寺院が駐車場を取り囲むように建ち、そして大きな木々が林立し、如何にも道教の聖地を感じさせる雰囲気漂っている。真正面にはガイドブックでよく紹介されている山門が存在感をアピールしている。寺院の数々はこの山門をくぐった先の山の中腹や山頂付近にあるのだが、ロープウエーはあるものの今回の旅行は時間が限られていたので、峰々を遠望するだけとなった。峰々には、いつか必ず来るよと心の中で呼びかけた。

青城山の名前の由来を調べると、常緑樹が多いため四季を通じて豊かな緑に囲まれており、緑の城のように見えることからこの名がついたという。またこの山は、前山と後山からなり、なぜか前

山には道教寺院、後山には仏教寺院が建てられている。このあたりは地震の被害をかなり受けたと見えて、海拔1260メートルの前山の頂上付近にある老君閣は、有名な道観らしいが大地震で倒壊した。再建された暁には開眼法要が営まれるそうだ。この旅行記が印

刷される頃には完成しているかもしれない。いずれにしても青城山がどのようなところなのか、案内して頂いたことはとても感謝している。

ここを後にして、都江堰に向かった。青城山から約10kmと比較的近い。ちなみに都江堰と青城山



王玲さんご夫妻と、青城山入口のモニュメントの前で記念撮影をする。右端が筆者。



青城山の山門

は2000年に世界文化遺産に指定されている。都江堰が近づくと木々の間から川が見え隠れしてきた。この川が岷江である。その昔、この地方の農民を苦しめた川である。九寨溝上流にほど近いあたりに源を発し、成都平野に流れ下っていく。その成都平野の入り口付近に都江堰は造られた。簡単に「造られた」と書いたが、水流の豊富な大河を外江と内江に分けるだけでなく、洪水を防ぐため内江の水が一定量を超えると、溢れた水を外江に流すようにした「飛沙堰」や灌漑用水用の水門をつくるなどの工夫もしている。

今日の建設機械など全くない時代に、竹籠の中に石を詰め込み、それを足場にして少しずつ造り上げていったようだ。洪水により折角組んだ足場も何度か流されたことであろう。紀元前3世紀に始まった工事は、完成まで数世紀を要したという。人々のすさまじいまでのエネルギーを感じないわけにいかない。日本でい

えば人柱を何百人も立てるほどの一大プロジェクトと言えようか。彼らの血のにじむような苦勞のおかげで成都平野はうるおい、「天府の国」と言われるようになった。

我々の車は、都江堰が見下ろせる高台の駐車場に止まった。すぐ近くの入り口で入場券を買って、(王さんが買ってくださった)入ると、すぐ下に降りる石段があり、ころばぬように用心しながら降りていく。結構急な階段なのだ。岷江を見ながら、という具合にいかない。

すると大きな寺院の屋根が行く手を阻むように軒を広げている。脇を通り抜け寺院を改めて見ると、正面の壁に「二王廟」と書かれている。大昔にこの地方を治めた王様が二人祀ってあるのかなと思ってい

ると、友人が都江堰を造った親子を祀ってあると教えてくれた。

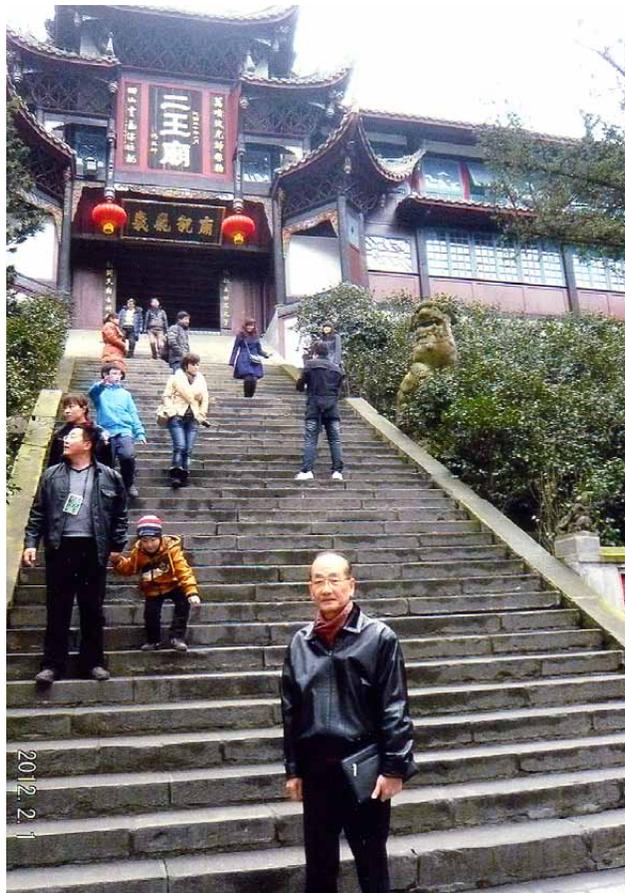
夜ホテルに戻った時、ガイドブックを調べると次のように説明されていた。「戦国時代(BC475年～BC221年)秦国の昭王の時代、蜀の太守であった李冰は息子の李二郎と地域の人々と一緒に一大水利事業を着手。岷江の大きな流れを成都方面と長江方面に分けるとともに、灌漑用水用の水門などの工事の指揮にあたった。その功績を称えるため李冰親子を王として祀った。」とあった。この親子は神として崇めるに充分値すると、改めて思いを深くした。今から二千年以上前の話である。

二王廟の前には、スチール写真が二枚立てかけられていた。何かと思って近くで見ると、大地震によって倒壊した時と倒壊前の二王廟であった。こなごなに壊れた無残な写真を見ると、いかにこの地震の揺れが激しかったかが想像できる。今見る復元された廟は、倒壊す

る前とそっくりに建てられていた。この廟は、地元に住んでいる人々の心の拠り所であることは想像に難くない。真っ先に復元の工事に着手したのであろうと思った。

さらに長い石段を下ると、瓦屋根が載っかっている高さ5メートルはあろうかと思われる白壁が行く手を遮るように屹立している。そこに一文字が上下左右1メートル程度の大きさで「造福万代」の四字が浮き出ている。鄧小平の自筆のようだ。達筆である。「未来永劫に幸福をもたらす」の意味であるが、都江堰に捧げるにふさわしい言葉である。

白壁を右に折れるとようやく眼前に岷江の流れが現れる。そして長い吊り橋が見え、観光客は皆そちらに向かって歩いている。吊り橋はまず中洲まで架



都江堰「二王廟」と石段

けられているが、川幅が広いので中ほどに支柱が二本立てられてある。この中洲から向こう岸までまたり橋で結ばれている。全長がおよそ500メートルあるという。

中洲はやはり竹籠に石を詰めたもので、積んで造られたいわば人工島である。この人工島はかなり細長いが、1kmあまりあると思われる。木々も鬱蒼と繁っている。人工島の川上にあたるところが「魚嘴」(魚の口の意味)と呼ばれ、魚の口のように三角形をしていて、頂点にあたるところで外江と内江に水流を分ける役目を果たしている。

吊り橋を渡り右に歩くと、それが見られるような広場が作られている。土産物店も二、三軒あった。そして島の最下流部分が前述の、洪水対策用に造られた「飛沙堰」である。

ところで吊り橋であるが、渡り始めると揺れるのである。それも少々の揺れではない。わざとこのような構造にしたのかと勘繰りたくなる。しかも川面から高く架けられていて、高所恐怖症の私は手すりを掴みながら慎重に渡った。渡り終えたときは本当にヤレヤレと思った。帰りはさきほど下ってきた石段を息を切らせながら登った。そばにいて同じように登った小学生が上に着いたとき、「累死我了」(死にそうだ、の意味)と言っていた。

太陽も大分西に傾き、長かった一日は終わろうとしている。ご夫妻に平日で仕事も休まれ、こんなに遠くまで案内して頂いたことを心から感謝した。そして持参してきたお土産を渡すためホテルに戻ると、これから皆で夕食を食べましようと言われた。予約もしてあるようなのでお言葉に甘え、また車に乗り込んだ。市内のどのあたりか分からないが、「老蓉客火鍋店」という看板の店の前で止まった。

もしかしてあの痺れるような四川料理かな、と思ったやほりの的中した。大連でも辛さ控えめの火

鍋料理は何度か食べたが、成都に来たからには本場の痺れを感じようと覚悟を決めた。お店の中に入ると6時前というのにもう満員盛況である。予約してある席に着くと、中年の女性と可愛い女性が座っていた。王さんの妹さんと娘さんでお互いに挨拶を交わした後、6人で乾杯した。皆さん心から温かく私を迎えてくださり、本当に楽しい歓迎会となった。

ところで火鍋料理であるが、赤黒く煮えたぎっているところに肉や野菜などをつけて食べたが、聞きしに勝る辛さである。どうぞどうぞと勧められたが、

口の中が痺れて味も分からないくらい。鍋の中心は仕切りがあり、熱い湯であったのでそれで薄めて食べた次第。しかし私を除く5人はおいしそうに次々に口に運んでいた。私は、中華料理はとても好きだが激辛の料理と香菜は

どうも苦手である。四川人のDNAはどうなっているのでしょうか。

約2時間の歓迎会は、無事終わりをつげ、帰途に就くことになった。食事中に、地下鉄1号線が2010年に初めて開通したと聞いたので、乗ってみたいと言ったのを王さんは覚えていてわざわざタクシーを拾い、「火車北駅」に連れて行ってくださった。そして4つ目のこの地下鉄の中心ともいえる駅「天府広場」までの切符を買っていただいた。切符はトランプの大きさと乗車賃は4元であった。

開通したばかりなので駅も電車もとてもきれいだ。ホームはガラス張りとなっていて、電車が入ってくると扉の部分が自動で左右に開く。現在2号線と4号線が建設中で、数年後はさらに機能的な都市になっていくであろう。「天府広場」駅で下車し地上に出ると、そこは美しい広場で明らかに成都市の中心と思われた。遠くに毛沢東の銅像があたりを睥睨するように立っていた。

(続く)



都江堰・入場券